

LAB Report

徳島大学大学院ヘルスバイオ サイエンス研究部循環器内科学



教室ですので、臨床・研究・教育の基本的な体制はすでに確立されています。こうしたなか、やはり新しい教室ですので、従来あった垣根が取り払われ、慣例にとらわれることもなく、教室員が自由に効率的に仕事に取り組める環境があるように思います。

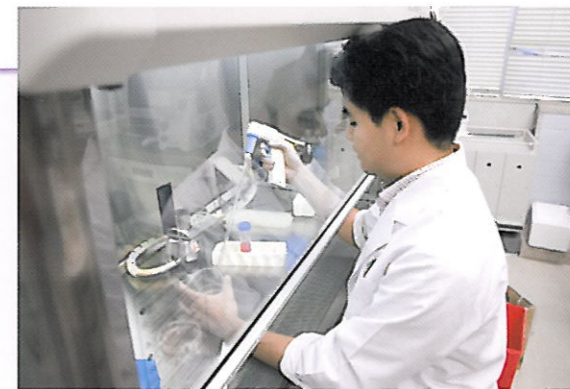
森下 先生の研究の歴史を含め、現在、教室で取り組んでいる研究を紹介してください。

佐田 私は循環器内科医の立場から、動脈硬化や血管形成術後再狭窄といった血

Tokushima Univ.



◎インタビュー◎
森下竜一
Ryuichi Morisita
大阪大学大学院医学系研究科
臨床遺伝子治療学教授



新医療技術(画像診断、バイオマーカー)を確立できないかと、分子生物学、細胞工学に加え、最先端の核医学を駆使して、日夜、奮闘中です。血管・心筋再生療法に関しては、自己の幹細胞を用いて自己動脈グラフトを創生できないかと検討したり、体性幹細胞に関する技術を応用して心筋細胞の再生を試みたりしています。

ば、遺伝子改変マウスなどを用いた実験

患者さんがどのように診断され治療されたのかを報告し、最近の治療法や検査法を解説したところ好評で、私たちも地域のニーズを知ることができ、非常に意義でした。

地域の先生方と連携しながら、臨床をよりアクティブに行う。そして、初めて臨床のなかから疑問が生まれる。それを基礎研究で証明し、臨床に還元するかたちへと昇華させる。それこそが臨床教室のあるべき姿と考えています。こうした教室のあり方をみて、患者さんか

そのほかに、最近では、動脈硬化と脂肪細胞の関連性に着目し、心臓血管外科と連携し、バイパス手術時に摘出した冠動脈周辺の脂肪組織の性状をさまざまな角度から検討しています。冠動脈イベントの危険因子として、心外膜の脂肪組織の厚さが指摘されています。しかし、厚さだけでなく、ほかに何らかの性状が関連しているのではないかと考えており、実際、冠動脈病変周囲においては炎症を起こしてアディポネクチンが低下しているなど、興味深い結果が出つつあります。

前述したような、私自身が専門としてきた研究をさらに同教室で発展させてい

地域の先生からも、若い医師から力ある教室だと感じてもらえたいと思います。

森下 最後に、先生の「座右の言」をお聞かせいただけますか。

佐田 私が好きな言葉で、若い医師によく話す言葉は、「Go Ahead！」つまり、「やりたいことをやる」ということ。そこで私は、自分が最もやりたい仕事ができるよう提供できるように努力しています。

森下 本日は貴重な話をありがとうございました。先生の教室の今後の発展を期待しています。



佐田政隆

Masataka Sata
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
循環器内科学教授

管病について、病態の解明、新しい治療法の開発、血管・心筋再生療法などの研究を行ってきました。

たとえば、動脈硬化の成因、血管形成術後再狭窄の機序に関して、骨髄から動員された前駆細胞が障害血管へ定着し、そこで血管平滑筋様細胞へと分化、増殖するために血管の内腔が狭窄するという新しい概念を提唱しました。現在は同概念に基づいて、動脈硬化の治療法、血管形成術後再狭窄の予防法の開発に取り組んでいます。一連の研究のなかで、薬剤溶出ステントが血管形成術後再狭窄を抑制するひとつの機序を明らかにしています。

森下 2008年4月、先生は徳島大学循環器内科の初代教授に就任されましたが、教室の沿革を教えてください。

佐田

森下 どのような教室ですか。

佐田

森下 今後の教室運営にあたっての抱負をお聞かせいただけますか。

佐田